賀茂真淵自筆草稿『西かへり』の解題と翻刻

高松亮太

元文元年（一七三六）、四十歳の賀茂真淵（元禄十年〔一六九七〕～明和六年〔一七六九〕）が遊学中の京から郷里浜松に帰郷する折の紀行『西帰』（別名『旅のなぐさ』）は、長らく紀行と冠されてはきたものの、旅程の記事や真淵自身の詠歌といった本来紀行にあるべき要素が欠け、通過した土地の地名や古語の考証に終始するなど、紀行というよりもむしろ、古典や古語に関する研究書の趣となっている。この点については、既に延享二年（一七四五）、門人の谷垣守によって、「右西帰一帖賀茂真淵のぬしの道の記なり。考証甚後人に益あり[1]」と評されるなど、当代から考証を尊重する見方がある程度浸透していたようである。しからば、『西帰』は、京における古典研究の成果が盛り込まれた、和学者真淵初期の考証として注意されてよい。

本書執筆の経緯については、冒頭の一節がその事情をよく伝えている[2]。

此たびは、道行振りに見えたらん所々書集めて、やむごとなき御わたりにも奉れかし。なほざりならんは何の珍しき事かあらん。古き名所などの横訛りいふなどを、ことわり物したらんや、悪からじ。

京から郷里浜松へ帰郷する真淵は、伏見稲荷大社の非蔵人大西親盛などから仰せつかっていた、「帰路に当たる古い名所などの言い伝えの違いなどについて考証し、その成果を高貴な辺りにも差し上げて下さい」との要望を承け、「古きことは行手ならでも考へつべかめれど（＝古い事柄は旅先でなくても考証可能だろうが）」と思いつつも、「旅の慰に心ゆかん時書付んずるは、眠り覚ますわざになんとて（＝旅の心を慰める縁に興味の湧く時に書き付けようとするのは、眠気を覚ますことであろうと思って）」、訪れた所々の地名や古語についての考証をものすことにしたという。『西帰』の別名が『旅のなぐさ』とされる所以もここにある。

かくして執筆された『西帰』ではあるが、該書は従来真淵自身の手にかかる自筆資料の存在が知られず、県門流和学者をはじめとする後人の写本や、板本『賀茂翁家集』によって、その内容が知られるのみであった。かかる状況の中で、このたび出現した『西かへり』なる写本は、他の『西帰』諸本と内容をほぼ同じくしながらも、特異な本文を伝えているとともに、膨大な訂正が施され

ており、注目すべき一本といえよう。稿者は先の小稿において、『西かへり』に施された訂正と諸本との比較などを通し、『西かへり』が真淵の自筆草稿であることを明らかにし、そのうえで『西帰』や『冠辞考』の生成過程と成立時期についての私見を提示した。[3]

本稿では、真淵自筆ということに加え、真淵の著作として最初のものであり、真淵壮年期の学問の様相を伝えているという資料的価値に鑑み、『西かへり』についてあらあら紹介したうえで、全部の翻刻を行い、諸氏の便に供することにしたい。

解題

まずは、『西かへり』の書誌について略記しておこう。稿者の架蔵にかかる『西かへり』は、賀茂真淵の自筆稿本。縦二三・〇×横五六〇・七糎（本紙五〇九・四糎、見返し二〇・〇糎、軸継紙三一・三糎）の巻子本一軸だが、本来は袋綴ないし仮綴の冊子本だったものと思われ、ノドや天地などの余白を裁断した十九葉を継いでいる。表紙は、金茶色地に二重唐草文様をあしらった金襴表紙（縦二三・〇×横二〇・〇糎）で、見返しは金切箔散らし。なお、冊子から巻子への改装は近世後期頃と目され、表紙や見返しなど、いかにも絢爛たる表装となっており、当時から真淵の自筆資料として珍重されてきたものと思量される。外題は、縦十一・五×横一・八糎の金布目地題簽に、本文とは別筆で「西かへり」と墨書される。内題はない。料紙は楮紙で、後半は虫損が激しく、全丁に亘り裏打ちが施されている。一葉目の裏には「第三百八十七号」と墨書された貼紙があり、旧蔵機関の整理番号と目されるが未詳。十六葉目の後半二行は天地が逆になっており、反古にしたものを再利用したものか（該丁の冒頭とは符合しない）。印記は、意図的に擦り消されたものと思しく、一辺五・八糎の朱方印であることは確認できるものの判読不能。この点については後述する。

十八・十九葉目には同筆の紙背があり、真淵が考証を試みながらも断念した跡と判断される。断簡にしてかつ虫損も激しいため内容が掴みづらいが、少々愚考すると、後掲翻刻の（紙背1）は、『万葉集』巻三所載の柿本人麻呂歌（二五二番）「荒たへの藤江の浦にすずき釣る海人とか見らむ旅行くわれを／一本に云く、「白たへの藤江の浦にいざりする」といふ」[4]をめぐる議論と思しく、冠辞の「荒栲（あらたへ）の」「白妙の」についての考証がなされ、さらに「ふぢ（藤）」と「ふじ（富士）」の相違を説くなど、契沖仮名遣いに依拠したごとき記事も見受けられる。なお関連する記事が『冠辞考』に見出せ、紙背の記事を発展させるかたちで『冠辞考』の記事をものしたか、あるいはこの紙背が『冠辞考』の草稿そのものいずれかということになろう。また（紙背2）は、『日本書紀』巻第三神武天皇条、[5]

是を来目歌と謂ふ。今し楽府に此の歌を奏ふには、猶し手量の大き小きと、音声の巨き細きと有り。

の引用は確認できるものの、議論の趣旨は掴めない。あるいは、のちの「いにしへの哥は調をもはらとせり、うたふ物なれば也」（『にひまなび』[6]）に通ずる議論がなされていたものか。とまれ、これらに類する話は『西帰』には存在せず、成稿に至る過程で除

外された考証ということになる。

続いて伝来について記しておく。右に述べたように、印記が擦り消されているため伝来は未詳ながら、聊か注意されたいのは、『國學院雑誌』第二十四巻第十一号「賀茂真淵翁百五十年祭号」（一九一八年十一月）に載るところの「賀茂真淵翁百五十年祭展覧会列品目録」の記事である。「第二室　第三区　草稿及び手沢本」の条には、他の草稿類とともに、「四三　西がへり　一巻　南葵文庫所蔵」とあって、「西がへり」と題された草稿が、南葵文庫に所蔵されていた由である。だが、『南葵文庫蔵書目録』（南葵文庫、一九〇八年）を検するに該書は見当たらず、関東大震災後に南葵文庫の蔵書の多くが移管された東京大学総合図書館南葵文庫（移管当時は東京帝国大学附属図書館）等にも所蔵が確認できない。また、南葵文庫の印記と『西かへり』に捺された印記の寸法も一致をみない。以上のことを勘案したうえで、旧稿では、一九二四年以降に南葵文庫に入り、東京帝国大学への移管以前に何らかの理由によって流出した可能性に言及した。ここでは、その後知り得た情報により、若干の訂正を行っておきたい。

印文が判読不能である以上、手掛かりとなるのは、印記の五・八糎四方という聊か大きめの寸法である。そこで、国文学研究資料館の蔵書印データベースの全項目検索にて、試みに「五・八（およびその前後一糎）」で検したところ、確認し得た唯一の印記が他でもない「東京帝国大学図書印」の印記であった。むろんデータベースに登録されていない印記でサイズの一致するものが存する可能性もあろうが、既述の南葵文庫と東京帝国大学附属図書館との関係からも東京帝国大学の旧蔵書である可能性が高い。以上から旧稿における稿者の見解を補正しておくと、『西かへり』は『南葵文庫蔵書目録』刊行後の一九〇八年以降南葵文庫に入り、関東大震災後に東京帝国大学附属図書館に移管されたものの何らかの理由で流出するという、数奇な運命を辿った資料ということになろうか。

内容については、後掲の図版や翻刻に明らかなごとく、本書には膨大な訂正が施されており、なかには二重三重に亘っている訂正や、数行分まとめて削除している例も見受けられるなど、真淵の苦心の跡が窺える。注（3）の拙稿では、訂正の様相と諸本との比較によって、訂正が概ね活かされていることを確認し、『西かへり』を草稿と断定する要素の一とした。ゆえに、詳細は旧稿に譲ることにし、本稿でそれらを再説することは避けるが、本書からは、のちに『万葉考』などの万葉研究や、『百人一首古説』・『宇比麻奈備』などの百人一首研究、また『伊勢物語古意』・『源氏物語新釈』といった物語研究などの本格的な研究へと発展、結実していく真淵学の萌芽が窺える。本書に見られる記事が、真淵のなかで如何に深化していったのか、[7]また考証めいた紀行という、当時では聊か変わり種といえる『西帰』が、後代に与えた余波はどの程度のものか。真淵学の始発ともいうべき『西かへり』の検討から派生する問題は少なくないが、如上の諸問題については稿を改めて検討することにしたい。

注

（1）内藤記念くすり博物館大同薬室文庫蔵『西帰東帰』の『西帰』本奥書。引用に際し、濁点、句読点などを適宜補った。

以下同。なお、本書は数名の和学者の手を経て、寛政十年古田広計の書写にかかる。

（2）引用は、『賀茂翁家集』文化三年板本（架蔵）による。

（3）拙稿「真淵紀行『西帰』の生成をめぐって　付、『冠辞考』成立管見」（『鈴屋学会報』第二十九号、二〇一二年十二月）。

（4）新日本古典文学大系1『万葉集』（岩波書店、一九九九年）一九九頁。ただし、振り仮名は省略した。以下同。

（5）新編日本古典文学全集2『日本書紀①』（小学館、一九九四年）二〇九頁。

（6）続群書類従完成会版『賀茂真淵全集』第十九巻二〇〇頁。

（7）『西帰』と真淵の万葉研究書との関係については、田中文雅「賀茂真淵の万葉研究―初期の著作『旅のなぐさ』『万葉集箚記』を中心にして―」（真淵生誕三百年記念論文集刊行会編『賀茂真淵とその門流』、続群書類従完成会、一九九九年）に考証が備わる。

翻刻凡例

一、翻刻は追い込みとし、段落が改められている場合は、一行空けにした。

一、可能な限り底本の原態を再現するよう努めたが、印刷の都合上、二重・三重に訂正が施されている場合は、途中の推敲は記さず、訂正後の本文のみを示すこととした。

一、傍訓、清濁、畳字「々」「ゝ」「〳〵」などは、原則として底本のままとしたが、読みやすさを考慮し、私に句読点を付した。

一、異体字、旧漢字、略字は通行の字体に改めた。

一、底本の破損、書き改めなどで判読不能な箇所は□で表した。

一、衍字や疑問箇所については（ママ）と注記した。

一、天地が逆になっている十六葉目の後半二行は〔〕で括って示し、紙背二種については（紙背1）（紙背2）と明示した。

翻刻

久しくもなりにける哉。みやこのたれかれいとむつましかるにつけてもおもへとも、わすられぬ物は故郷のことにそ侍るまして母をおかみまいらせんとてなん、やむことなきわたりより始めて、あからさまの行かひみちとて卯月の末にたちぬ。稲荷の神主たれかれ、非蔵人なるたれかれ、逢坂とて送るめり。こたみは道行ふりに見聞んことを書とめて、やんことなきわたりにも奉れよかし。後の人〳〵のすなるは何のめつらしきわさならん。中〳〵ふかきことのよこなれる名所の多きを行手にあらんをは、ことわりなとせよかしといふ也。けふもこたみは哥はよまし。ふるき事は行手ならてもしるしつへかめれと、旅のなくさにところ〳〵書つけんは、ねむりさますわさならんとてす也。

○山科に御廟野といふ野あり。その所の山そ、天智天皇のみさゝきなめり。額田王の歌に山しなのかゝみの山に此みさゝきあるよし、みゆけにもまろなる山のかたちなれは、さは名付たるにや。近江なるは所の名よりやいふらん。とよ国なるはいかに侍るにや。さて此すへらき馬にのりて出まし、に、その行ませる所をしらす、

沓の落たる所をみさゝきとすなと紹運録といふ物に書り。すへて〳〵此ふみはいとあとなしことのみ多きそかし。日本紀に此みやまひ厚しくませる時、おほとのゝうちに皇太子をめして、後のことをのたまひおきてゝ、かみあかり給へることみえ、万葉に御やまひませる時大后の御うたありかみあかり給ひての同し后の御哥も侍り。且かのみさゝきに御はかつかへせる官〳〵の、そのかきりはてゝあかるゝ時の、ぬかたの王のうたも侍れは、近江大津のみやにてかみあかり給ふこと、うたかひなきをや。又紹運録には田原の大皇とも申のよし侍るよ。それは此天皇の第七のみこにて、志貴のみこと申せしは、光仁天皇の御父にませし故に後に追崇みて、春日の宮の天皇と申し田原といふ所に御陵あれは、田原の天皇とも申せしを、たゝしき史をも見さる人の作れる物也。さて天智天皇は後の世ののりをさため給ひなとあるか中に、崇とみ侍ることにて七つの陵のうちにして世々にあかめ給ふへきことなるを、いかて後〳〵はさる御事もうけ給り侍らぬ也。

○相坂に手向することはさることにて、こゝをすなはち手向の山ともいひけん。万葉集に見近江海晩頭還来作哥、

ゆふたゝみ手向の山をけふこえていつれの、へにいほりせん子

等とそ侍り。貫之のぬしのあふ坂山にいたりてたむけをいのりとかゝれしは万葉に相坂をこゆるよし、万葉の長哥にみえたり。さてたむけとは斎礼とも祈とも書て、たむけとよめるは、今手向することなるを、則ち躰にいひなして、其神ともするか故に、○いのりとはかける也又或人のいはく俗に山のたうけといふは、道衍人国のさかひのみね、其外あら山のいたゝきなと通る人の、には手向せることにてそこをやかてたむけといふを、連声にてたうけといふなるへしとさも侍るへし。又貫之の集に、相しりたる人の物へ行にぬさやるとて、

行けふもかへらん時も玉ほこのひきもの神をいのれとそおもふ

といふ哥の侍り。此ひきもの神も道のかみとは聞れと、後には聞侍らぬ御名也。古今集に、下の帯の道はかた〳〵わかるともとよめるを、顕昭の説なとも大かた聞えて侍れと、或人のいはく、いさなきのおほんかみ、あはきか原にて、御帯をなけすて給ふ時になれる神の御名を、道のなかちはの神といふ。これそ道の神にて、そのものたね御帯よりなれる故に、下のをひの道とはつゝけたるへしと。下の帯は、めをのひも、両につゝくる物なるに、かねて道とつゝきたらは右の説もさること也。同し時御褌をなけすて給ふになれる神の御名をちまたの神といふ。此御はかまをひきもともいふにてより所なるへく思へは、ことのついてにいふのみ。

○こゝにせみまろの社とて侍り。めつふれたる人也といへるはひかことなり。後撰集のかの人の哥のことはに、逢坂の関に庵室を作りて住けるに行かふ人を見てと侍れは也。又、宇治物語に博雅の三位と云ける人は、木幡とかやに目つふれたる法師の、世にあやしけなるに琵琶はならひけりとあれは也。されとも無明抄に蟬まろのことをいふに、よしみねのむねさたの、和琴ならひにかよひけんよし○侍るも、ふるくさる説のありしにや。清政の集に、ある所にてことなとひきてあそふに、夜更て月も入ぬ。うちの人〳〵も入ぬる音しけるに、琴をしらへていたしたるに、

あふ坂の関路にとしはへぬれともけふのしみつや名をはなかさ

んとあるは、より所かましきなり。且延喜の第四のみこなといふは、いと〳〵あらぬひかことなり。哥の様も延喜以前の人の口つき也。その上、皇子に侍らは、いかに出家し給ふとも、せみまろとのみ後撰集に書へきにあらす。況やさては、先帝朱雀（当今村上の皇子に）の御兄にあたるをや。ある説に、古今集の、大坂の嵐の風はさむけれとなといふ哥は、せみ丸の作也なと付そへたる説をまこと、して、えきの御としのほとをおして、御子にあらすといふは、道行人に問て境を争ふかことし。又或説に、逢坂に四の宮ある事は延喜よりまへの事なるへし。小町家集に、四のみ子うせ給へるつとめて風ふくに、

今朝よりはかなしのみやの秋風やまたあふ坂もあらしとおもへは、是今の四の宮川のこと、聞ゆといへるはよし。又是やこの行もかへるもといふ哥をとき誤れる人の多き也。此こしの句は、後撰にも素性集にもわかれつ、とあり。今わかれてはとある本は、そらおほえのたかひなるへし。素性集はおほつかなき物なから、今もよりつ、と有し証（けんより所とはなれる也。）とはなりぬあふ坂は、三つの関の中にまちかく京に出入ところなれは、行かひしけきを、行者も帰るものも、しるもしらぬも、わかれつ、あひつ、するは、是や此あふ坂の関也といふを、関の名によせて、しるもしらぬも逢といひかけたり。且つ、は、上におきて、下の逢といふ詞にも配りて意得る古への句の法例にて、わかれつ、逢つ、といふてにをは也。又此はしめの句を意得かぬる人も有にや。万葉集のはしめの巻に、越勢能山時阿閉皇女御作歌、

此也是能倭尓四手者我恋流木路尓有云名二負勢能山○これは（大和にしては）

我恋るとよませ給ふ。御夫は日並知皇子尊也。

此御夫日並斯皇子の大和に留りましますを同し此山の名に負を（夫をはせといへはその）とよみかしみおほしてよみ給ひて也はしめの句より終りの句に恋せることより也（○これを）おもひ合せてしらるゝ也。又或人いはく此哥に会者定離の心ありなといふ（也）○或人云、さてはは（を）しめの句と終りの句との首尾たかひもとれりと。まことにしかなり。○やゝもすれは仏の家のことをいふは古哥てふ物をよく心得ぬ人のしわさなめり付そ人侍るは後のよのきた也○定家卿のの給ふことく、哥ははかなくのみよむ事なるを、古哥とさへいへはえもいはぬふかき心あるらんとく（様に）いふは、かへりて物しらぬ人のこと也。凡うたには、直ちによみくたせるあり。詞を上下にわかちておけるあり。句をへたて、心をかよはせるあり。打かへしてこゝろへるあり。その外さま〳〵なるを、よく見得てとくへきなめり。此哥は一の句は五の句にかけ、二の句と四の句はつらねて心得、三の句は又五の句へかけて見へき也。只に三十字一字にてかきりなき心をのふれたる時によりて、（ママ）たゝちにのみは句のおきかたきなり（め）。

○△ひえの山——

○あふみのみかみ山は、（和名集の近江の国に、三上の里・尓保の里・篠原の里なと野洲の郡に侍れり。）末の世には三十上と書て（れは、ことはの同しけれは三上とも書たるへし。）延喜の式には御神と書れたり万葉にさゝ波の国津みかみの浦さひてと侍るを、比えの御神のこと也なといふはおほつかなし。（御神の山御神の里といふあれは、）此山に国津御神をいはひ来るより、此うらをもさはいふへきにこそ。○又比えの山は、伝教大師のひらかれける様におもへるを、懐風藻といふ物にはやく寺の侍りける也。又日吉の社を日よしと唱ふるはよこなまれるなりふるき国の史に日枝と書たれは、ひえと唱ふること也。凡いにしへは、よきをはえきといひて吉の字はえ

の仮字にも又はえきとも古事記歌にみえしの、えしのとあるは、み吉野の吉野也。住吉をも方葉其外ふるき物にはすみのえとのみいひたるを、末の世には吉の字はよしとのみよむこと、おもひて、すみよし日よしといふよ。比えの山のふもとにます御神なれは、日えといはんそことわりなりけり。

○もる山は、草津のうまやのみの路にか、る所をもる山といへは、それなるへくおもふに、同しぬしの集に、竹生嶋にまうつるにもる山といふ所にてとて哥のはへるをみれは、右のもり山は京より竹生嶋へ行手にあらねはおほつかなし。万葉に、近江志津の帝かみあかり給へる後の哥に、さゝ波の大山守とよみしは、山には山守、野には野守の侍りて、其つかさをいへは、今いふ守山にはあらねと、右のおほつかなきより強ておもふには、かの山守の侍りし山を、もる山なと其後にいひけるにや。さらは長等なとのつゝきにこそ侍らめ。

○鈴鹿山いせをのあまのすてころもといふ哥、ちかきほとにもやんことなき御もとよりうへ人なとにも問給ふに、かうかへ給へる人侍らすといへり。まことにしりかたき事也。むかし春満にある人の問侍りに此哥のはしに臣の哥にて、はしに女のもとにきぬをぬきおきてとりにつかはすとてと侍れは、みつからを海人にたとへたれは即ち男の海人といふなるへしさても猶鈴鹿山と侍るそ、下につゝきても侍らぬ也。強ていはゝ、伊勢の道のくちなれは、伊勢といはんとてかりにおけるか、もしくは鈴鹿川とに□もしけん。さらは此川は瀬々の多けれは、五十瀬とつゝけん為なるへしといへり。又ある人のいはく、すゝか川にや侍らん。此所ははらへする所にて、祓□□衣をすつることの侍るをよせて、すて衣とよみけんかしと。今おもふに、下にしほなれけるなと侍るわたり、さまてはなくて、只あまのすてふねなとの心にてや侍らん。はらへのそて衣なとは余りのことなるへし。

○庄野のすく過ていく里はかりにか侍らん、泉川とて橋わたせり。鴨長明か、

いせ人はひかことしけり津島よりかひ川ゆけはいつみの、原とよみたる所なるへし。□の国にはいかなるにか、ひかこと、いふことの侍る□□。清輔朝臣の書る物は伊勢物語といふ事□□ひかことをかまふる故のよしとして伊勢物か□□□□いふ伊勢は、僻の義なりと侍り。けにも伊勢物かたりの様にかなへる説也。堀川院百首の池といふ題にて、藤原忠房朝臣、

いせなとはひかことそともおもはましやまとなるてふみまさかの池とよまれたるをおもへはいと古くさることいひ伝へたる○なるへし。ちかきほとのことならは題の哥によむへからねは、也西行法□、

いせ人はひかことしけりさゝくりのさゝにはならて柴にこそなれとよみける也強ていはゝ、君かの斎宮の犯され給ふといふことの正覧にて、京わらへのわさうたにそれとはさゝて、いせ人はひかことしけりとうたひもやしつらんを、後までも諺にいひ伝へしにや。○いせ物語は伊勢の御の書て、七條后に奉れりなといふよし、にやいと心得ぬる也。二條后は七條の后の□をはにて、伊勢と御のましくしてましましけるを、御姪のきさいの宮へ、そのま

しますほとの后のみそか□□□ことを書あらはして奉るをこのも、のやは有へし。その比の藤原家の御いきほひとを□□てあらぬ□□を後くはいふめりまた□□□朝臣のみつから書し物にやと侍るも、いかにそ□。おほけなきことをなして、それしかりとみつ□□書おきて、たれにつたへことするにや。また心にあらん様を、あたし人のしるへからすなと侍るも心得ぬこと也。ふみ作るもの、つねとしてあらんことよりもふかくもを、しくも似つかはしくも書なすなめりそれしらすとてかゝさらんやは中こゝろ物かたりの様をよく見しらぬころは、古今より先なる物とおもへる誤りさへ侍り。あらぬ哥をもて贈答をなし、又は一こと二ことをかへて心をことにし、時代官位□のたくひこと〳〵くたかへてて、それにしてそれならぬさまに書なしたる物也。物かたりの物かたりなる様をしらは、なり平のなり平ならぬ様をもしるへし。これにこゝに用なきに似たれとも、所の名、時のさまなとのことをいふに、此ことをあしき心ならひ侍りて、よくもわきまへぬわらはへの侍れは、それか為にと□るへ□。

○あさけ川といふ川あり。是は朝明の郡なるらし、和名集に侍りて、此の二字をあさけとよめり。万葉集に、妹に恋吾乃松原といふ左の注に、此所は三重の郡にありて朝明にちかきよしみゆ。此御製は天平十二年十月の行幸の時なめり。おほん旅ねの夜るを妹にこひあかすといふ心につゝけさせ給へる也。むかしは吾をわれとはいはて、あれともあがともあともいひたれは、吾は明のこゝろにいひかけ給へり。いひかけにはすみにこりをいとはさるためし多きなり。

○物かたりに、いせ、をはりのあはひの海つらにたつ波をみてと侍るに、同しつゝきに信濃なるあさまのたけをよみけんをも、とり〳〵にあけつろふらんよ。みの路よりも猶浅間山の畑がみゆへからす。且いせ、尾張かあはひか海つらゆきて、はたみの路を行へきも覚えす。されはことたひの哥なるを同しつゝきにあけたるのみ也此ものかたりの様をよくしりてのちあきらむへし。且後撰集に東にくたるに過ぬるかた恋しくおもひけるに、川のほとりを行に、波かたちにけれはと侍れは、物かたりのいせ、尾張のあはひの海つらといふも作りかへたる物なるをや。さて

いとゝしく過ゆくかたの恋しきにといふ歌を、いかてふるき人かうたかはさりけん。東にくたるに、過来たるあとの郡の方こそ恋しかるへきを、□行さきの恋しきと侍るよ是は過ぬしと書しをむかしのよき手のなたらかに書しは、見まかふこと多けれは、○こしを○ゆくとよみまかひし給へし。真字□書たる本あるに、過往とかゝる往はゆくともよめと、多くは去の心に用ゐたることも侍れ□、過は□□のむねにかきたるへし。後撰にも過ぬるかた恋しくおもひけるにと侍るなかた〳〵おもひのこすへし。

○催馬楽うたに、桜人、その舟ちゝめ、しまつたを、とまちつくれる、みてかへりこんやそよや、□すかへりこんやそよや、ことをこそあすとはいはめ、をちかたに、つまさるせなゝれは、あすもさねこしやそよや、しやすもさねこしやそよや、さくら人はさくらといふ所の人也、なには人、すま人といふ類ひ也。万葉集に、

桜田へたつ鳴わたるあゆちかた塩ひにけらしたつ鳴□□とある
に和名集に、尾張の国愛智郡にあつた（厚田郷□ 作良郷・成海の郷）佐久良の郷あれは
（あつた・なるみのあはひの海辺にて）桜田もそこの田をいふなるへしか□□□□此国のところの名な
ること知へしその舟ちゝめとは其ふねとゝめなるへし。あゆちか
たなとより、通ふ舟を、其ふねとゝめよ、のりて島にある所の田
を○みてかへりこんと也や。そよやは拍子のことは也。さすかへ
りこんは、あすかへりこん也。ことをこそあすとはいはめ。こと
をといふつゝきあり。こそは古事記のいかたにことをこそ菅とは
いはめ、日本紀にも、ことをこそたゝみとはいはめといふ御哥侍
り。とも□□ことしこそといふへきを、ことをとあるはいにしへ
のならひ也。をちかたにつまさるせなゝれはとは、遠方につまあ
る君なれは也。さるはしあの二ことを編むれは、さの一ことゝな
れは也。又あの類しても通ふなり。せなといふは□万葉に家捗
（家持と池主）卿と池主の贈答に、かたみにわかせ子とよみた□□る□しるへし。
わかせ子とは夫婦たかひにゆふなとゝあり人のわかせ子にみせん
とおもひし梅の花といふ哥を、あしく考へたる人、夫婦かよはし
ていふことゝとおもへるにやまれり。せなのなはそへたる詞にて、
古事記・日本（ママ）になとには、兄をなせ、姉をなね□□□にそへても
いへり。さねこしはまことに来らし也。しやすもは、しやのかへ
りさなれは、上の如くさすもにて、即ちあすも也。うたふ所のお
のつからかよひて、しやと聞ゆる□□□□。

○物かたりに八橋のことをいふに、水ゆく川の□□□なれは、は
しを八つわたせりと侍るを、よくおもへ□、水ゆく川のくもてな
といふあたり、よく心得かたし。真字に書るをみれは（本に）水堰川乃蜘
手なれはと侍るによれは、水せく川也けり。せの字をゆくと書た
かへたるよりなる（りと覚ゆ。ふる物はかゝる書あやまりの多そかし。さて）へしきて水をせくは苗代なとに引かけん為也。
川をせきて左右へ四つつ、八つの溝をなしつゝ、横さまになかせ
は、蜘の手の四つつ、八つあるか如くとてくもてとはいへり且其
川そひ道の両方に侍りなは、はしも四つつ、八つの□給へしさる
ことはいなかにはかた〳〵に侍れと、□□□八つ□ては、いとめ
つらかなれは、おのつから所の名ともなりにけんかし。

○催馬楽のうたに　ぬき川のせゝのやはらたまくら、やはらかに、
ぬるよはなくておやさくるつまは、ましてる由はしも、しかしあら□、や
二段、おやさくるつまは、ましてる由はしも、しかしあら□、や
はきのいちに、くつかひに□かん
三段、くつかはゝ、ちかひのほそしきをかへ、さしはきて、うは
もとりき、てみやちかよはん
おやさくるつまは、万葉にきのゝふなはし取はなしおやはさくれ
とゝよめる類也ましてる日はしもと侍る本□よ□上下のつゝきて
も聞えされは、ましてるはしもはま□□き也。ましは万葉にまし
ときはの木といふこと□、ま□□いよ〳〵也。るはしもはうる
はしも也。○直に下□□□□ゆかんをかいにかんかひと□□し□
□はいの音はへるま□□
〔□かへて西□○しらぬ日□くし○しな□□越つ□あまの風□あ
な□□□□□桜花今盛なり□□の姿於之弓流岩きこしめすな
る〕
てのても□□つゝけて□なれ□○万葉哥におもひ□□□□を略せ
る類ひ也。き十□□□にては女の□□□□しかしあらはやはきの市

にくつかひにかん□□□□こたへ也。しかしあらはのしは、たすけ字也にてしからは也。然はかりわれをうるはしみおもふなと、行かよふ料に市くつをかはんと也。やはき（矢作）の市は三河の国のをか崎をいふ。くつはかひにかんはかひにいかん也。にの字を□□いへはいの音のある故にいを略したる也。且ゆかんなるをいかんといふも、いにしへより（拾遺にかめ山にいく薬とつ、けゝ源氏にいかまはしきは命なりけりと）ゆといとかよはしいふとこと数しらす。くつかはゝ、ちかいのほそしきをかへ、さし□□□きてみやちかよはん、此三段は女のことは也（いへるは、皆生と行をかねて）ちかいのほそしきを、或人は（説に）杏のぬひめのちいさきをいふと侍るも朝かた（に）□は、又ある人は俗に大はなをといふならんといへり。□□□□□そしきをかへといふは、かの大□□を□□□□□からね□、女のこのみてほそきをといふと心得たる□からん。猶杏の緒（はな）をちかいといはんは打ちかへて緒を付くるよしにていふにや猶おほつかなし。今おも□□□□集（せんかいといふへきを）に線鞋を漢語抄を引て、千開乃久都と侍る千開にて、〇千かいと書（よみ誤り）しを、ちかひと書る書たかへなとしける生（なるべし）せんかいは音なれとも、此中にはとはり帳をとも、大領のまなむめとも、後世の□と□□音のまゝにもいへる類ひ多し。又同し和□□□□□を絶綫兼用男女通者と侍れは、女も□（の）つくはちいさく作りたるも侍るへけれは、千か□□細しきをかへといふへし。うはもとりきて褶をとり著て也けれをしひらともふふ□□にうはものすそにきてゝなといひ、此下にうはものすそぬれ下ものすそぬれといふ也。源□夕かほ巻にひ（ママ）しらたつものけしきはかり引かけてといふあたりをみれは、え□は裳をきて其上にしひらをこしに引著を、うちくに忍ひたるさまなれは、しひらはかりを引かけといへり。□□□□かよふほとなれは、なかき下裳にはあらて、うはも計引かけてかよはんさまなるへし。

裾をとりきて也。下褶をはひらみといふ也。□裳といふも□□は下にひらみをとり□て上に□□を引かくれ□□□□□□下もはひらみ也。男□袴の上に褶をきる故に、俗に□□□□ひらみといふなり。衣服令（の）に集解に、褶を□□帯□□す□□を□のお（ヒラ□□□□□るにてひら□）を略しひ□□ひ□□□□みの清音に通ふ例ありてひらおひをひらみ（ことと□とはかよ□□な□□侍り）と□□□りさて或説に褶をうはもとよむと侍るはおほつかなし。源氏物かたりに、しひらたつ物けしきはかり□□□なと侍るは、忍ひたる所にての様なれは、上裳をはそきて、褶はかり引かけたるなるへし。此下（又）にも上ものすそ□□め□下ものすそぬれ、又万葉集にも下ものすそに□□なとよめる物也。そのうはも也。みやちは和名集に□国の宝飯の郡に宮道（美也知）といふさとを出せ□り。か□みやち山もこゝ（もそこ）なるへし。さて此女、此さとあた□□□に宮ちかよはんといふなるへけん。

△ぬき川は或説に、みのゝ国にいつぬき川ありと侍り□□□の□をうたへきつゝきならねは、三河に□□□の□なるへし。せゝのやはらはひちりこ也。〇と□（和手）いはんとてのつゝけ（いひかけ）也。あつふすまなこやといはんことくや、枕やはらかに□□なくといへり。おやさくるつまはとは、万葉にさのゝ□□とりはなちおやはさくれと、いふかことし。是は女の□□にて、此つまを（は）夫をさす也。矢作川のかははのさとをへて、其上はさなきの山のふもとを（にそひ）不てなかれくめり。（此川上に豊川といふ所も□は加茂郡のころも）さなきの社は延喜式には狭投神社（神社侍り。和名抄によれは古事記に）頬那芸神にます。此をいはひしよりして山の名ともなれる歟。されとも今は景□□□□□いまつるといへり。

（紙背1）

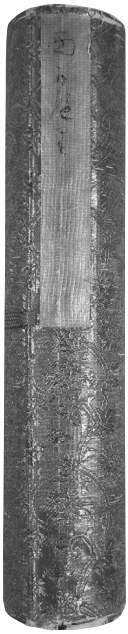
（以上欠）妙なることくおもひ□□□□□□といふをを、しろたへにとは、なほせ□□□□麁〇をあらたへとよむに、あらとて妙なり。是いはん理りもなきをや。又白たへの藤□□か浦ともあらたへのふちえが浦ともつゝけしは藤□の義なるを、藤はふち、冨士□ふしの仮字をし□わきまへさるにや。□心も打むかひたる所の筆をして□□（以下欠）

（紙背2）

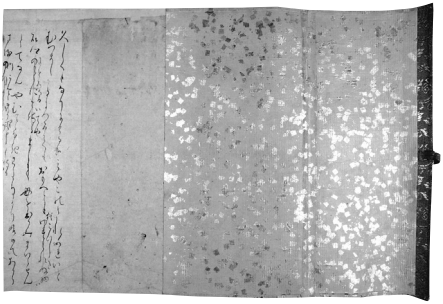
（以上欠）には、まのあたりに教とりて□古うたのあ□とりえらみて、をしふることはあらねとも、神□の御時の久目うたなといふを、中ころの□□ては楽府といはれしこと日本紀に見え、声のふときほそきなと（以下欠）

〔付記〕『西かへり』を入手するに際し、加藤定彦先生より貴重なご助言を賜りました。末筆ながら心より鳴謝申し上げます。

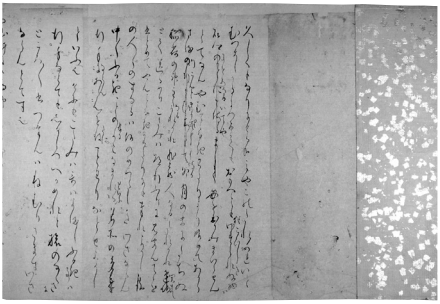
（たかまつりょうた　国文学研究資料館機関研究員）



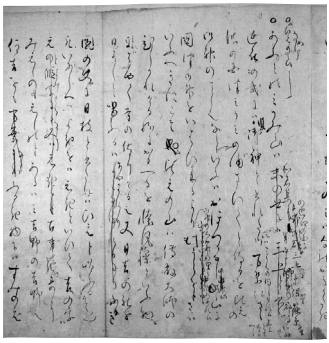
（図版1）表紙



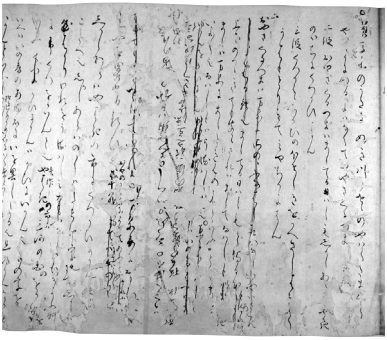
（図版2）見返し



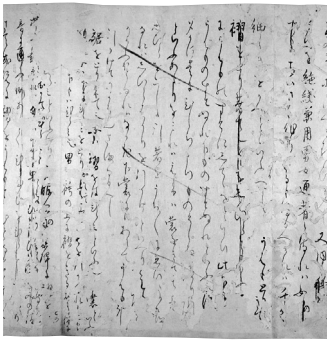
（図版3）巻頭



（図版4）修正・挿入の例



（図版6）天地逆



（図版5）修正の例

（図版7）巻末